

として
掲げるべき

政界展望



令和おじさんと呼ばれて

ジャーナリスト

鈴木哲夫



新首相「らしさ」を 新内閣の政権構想 堂々と

「菅政権」は 「安倍なき安倍1強体制」?

今回の自民党総裁選の構図と菅義偉新首相誕生について、自民党竹下派の重鎮は言った。

「簡単に言えば、安倍晋三がいない『安倍1強体制』が続くということだ」

安倍なき安倍1強?

「菅氏を推薦することにした派閥の面々は、実は安倍政権の中で権力を握ってきた面々。麻生太郎副総理、細田派からは西村康稔経済再生担当相や萩生田光一文科相など多くの閣僚。竹下派は茂木敏光外相や加藤勝信厚労相、二階派はもちろん二階俊博幹事長自身。つまり、安倍政権における主流で権力を握ってきた彼らが、トップが代わってもそのまま自分たちの権力を移行することを第一に動いたということだ。そのためには菅氏だと最もおさまりがよかったということだ」

安倍首相の退陣記者会見直後から一気に主要派閥が蠢きだし、菅氏の流れがあればよあれよという間に固

まった。その背景には、なるほど、権力をそのまま移行しようという裏舞台があったのだ。

安倍首相にとっては、じつに儂い去り際だったかもしれない。なぜなら、辞職の速報が流れた直後からも自民党の議員の多くが安倍首相のほうを見ていなかったからだ。

8月27日。安倍晋三首相が夕方5時からの記者会見で、自ら病気にわたって続いた政権がいよいよ終わりを迎えた瞬間だった。

ところが、私は、その時刻、自民党本部や国会議事堂裏の議員会館のそれぞれの部屋をできる限り回ったところ、各部屋のテレビは記者会見の生中継が映し出されていたが、それぞれの議員はスマホで頻繁に連絡を取り合い外へと飛び出して行った。

「いまから(派閥のメンバーで)集まる。総裁選だ。これからキーパーソンは総裁選を仕切る二階幹事長。どんな形の総裁選にするのか。それによって票の出方がまったく違ってくる」(岸田派ベテラン)

「今後二階さんの発言ひとつひとつ

にみんなが雪崩を打つことになるだろう。(二階派の議員と)いまから会う」(石破派幹部)

誰も、辞任会見の中身などもう関係ないのだ。一旦辞任を表明した瞬間から安倍首相に用はない。権力闘争の非情さを見せつけられた。

代わりにポスト安倍に向けて、党内で多くがもう二階氏の一举一動を見ている。二階氏がどう動き誰を支持するかが総裁選を決定づけるからである。

ただ、確かに病気は気の毒だ。しかし、首相という地位は国民の生命財産を預かる最高責任者だ。新型コロナウイルス対策が後手に回ってどれだけの犠牲が出たか。7年8か月の間の功罪もある。首相寄りの一部マスコミは「大宰相だった」などと持ち上げたが、一方で長すぎた政権は官僚に忖度を生み、首相の「おともだち」が重用され、多くの自民党議員がイエスマンに成り下がった。次の政権へつなぐ総括が必要だ。負の遺産を払拭して、与党・自民党は





菅義偉氏

30万円給付が二階氏や公明党に一律10万円へとひっくり返されるなど失敗した。

これに対して、マスコミ各社の世論調査でポスト安倍の一番手に浮上してきたのが石破氏。新型コロナでも特措法の改正や持論の防災省の中に新型コロナなど感染症対応も取り入れることを提案したり、地方自治体への支援も訴えたりしてきた。特に地方は石破氏のライフワークだ。

石破氏については、それまで「理屈っぽい」「いちど自民党を飛び出した」「面倒見が悪い」など党内の議員人気がなかったが、最近変化も表れてきていた。それは総選挙が近づいてきていたからだ。衆議院任期は来年10月。自民党で選挙地盤がまだ弱い2回生議員は「いつ選挙があってもおかしくない。選挙の顔に国民の人気の石破さんという考え方は十分ある」。自民党閣僚経験者も、「石破氏を嫌いでも選挙を考えるなら石破氏もありと割り切れるのが自民党の強さ」と話していた。また、若手議員の経済勉強会グループ約20人は「我々の政策に同意してくれ

ば総裁選で推してもいい」と話していた。

石破氏自身も私にこう言った。「(総裁選では)動くべきときに動く。会うべき人に会う」

政局下手の石破氏が水面下でキーマンと接触をはかる。それを実行に移した1つが総裁選でキーマンとなる二階氏との接触だった。

「マスコミに報じられている2人の会合は数回とされているが、実はメディア界重鎮の仲介で何度も顔を合わせてきていた。そこではポスト安倍へ二階氏の指南も受けている(石破派幹部)」

岸田氏も、最近では積極的にメディアに露出するようになり、議員宿舎にテレビカメラを入れさせるなど、イメージ戦略もはかってきている。

ところが、安倍首相は自らの後継についてこんなこだわりがあった。「石破氏だけは絶対に認めない。第1次政権の時から公然と批判し退陣すら迫ったことなど首相は許せな

新しい首相を選出し政権を作らなければならぬ。

だが、残念ながらポスト安倍をめぐって談合や妥協が水面下で進められたのだ。

ポスト安倍の総裁選挙に早々に名乗りを挙げたのは、党内では常に政権に一石を投じてきた石破茂元幹事長。もう1人は岸田文雄政調会長だ。岸田氏はこれまでポスト安倍と言われながら発信力や政権構想などの曖昧さから後塵を拝してきたが、今回いよいよ尻に火がついた。ここで出

なければ首相への道は閉ざされてしまう。

これまでポスト安倍の最有力として名前が挙がってきたのは岸田氏。安倍首相の意中の後継者とされる。首相は昨年の人事で総裁の登竜門の幹事長に就けようとしたが、二階氏の「代えるなら憲法改正で協力しない」とのブラフに屈してこれに失敗した。

安倍首相は新型コロナでも岸田氏の提言などを演出し見せ場を作ろうとしたが、条件付き





石破茂氏



い」(首相側近議員)
つまり、石破氏には絶対にしたくない。かといって後継本命の岸田氏も心もとなく岸田氏では政権運営は失敗しそう。
そこで、まさに「ワンポイント」候補というプランが浮上したのだ。

画策したのは、出馬表明した石破・岸田両氏の両派閥以外の5つの主要派閥だった。細田派(安倍首相の派閥)、麻生派、二階派、竹下派、石原派である。冒頭の竹下派重鎮の言う、まさに権力移行をはかる5派閥だ。

そして、その「ワンポイント」候補が、菅氏と麻生氏の2人だったのだ。

任期中途中で辞任した場合、任期は党則で安倍首相の残りの来年9月までの1年。つまり、新型コロナウイルス対策の継続性などを考えれば1年だけ特別にワンポイントという大義がつく。そこで、まず安倍首相側近の1人が強力に推そうとしたのが麻生氏だったのである。

「石破氏はNO、岸田氏もダメ。ならば盟友の麻生氏に1年やってもらう。麻生氏は、岸田氏に対して『来年の総裁選であなたにつなぐ。1年間要職で準備しろ』と抱き込んで、細田派、麻生派、岸田派の三派連合で200票以上。今回の病気の件も麻生氏には直接ある程度のこととは事前に話していたようだ」(安倍首相周辺)

ところが、麻生氏はこのプランを断ったという。

「自らの年齢を考えたたり、もし自分が首相になっても国民の支持が得られるのかなど悩んでの判断だったよ」(麻生氏周辺)

そこで次に浮上したのが菅氏。

主要5派閥が、首相辞任会見後の週末の2日間で、菅氏を推すと明言し流れを作った。

今回の総裁選は、両院議員総会で国会議員票394票と地方の都道府県連にそれぞれ与えられた3票の合計、投票総数535票で争われる。本来なら全国の党員党友が参加するが、首相が突然辞めるなど緊急時は政治空白なども考えてスピーディに規模を縮小し両院議員中心の投票で決めることが党則では認められている。

ただ、この投票方法だと、国会議員票の比重が大きく、しかも5派閥が菅氏を支持したことによって、菅氏の圧勝の流れが決まってしまったのだ。国民的人気の高い石破氏すらあえなく吹っ飛んだというわけだ。

早くも始まった

新政権内の「主導権争い」

ただ、5派閥の面々は、それぞれは必ずしも良好な関係ではなく、思



惑も違う。

それが表面化したのが麻生・細田・竹下三派会長と一緒に並んで異例の合同記者会見を行ったことだ。「菅支持」を揃って口にした。

この会見に怒ったのが二階派。同派ベテランの河村健夫元官房長官は、「なぜ三派だけなのか。二階派を外すのか」とぶつけたが、ここにこそ権力を温存したい面々同士の主導権争いが見え隠れする。

連立与党ベテラン議員は言う。

「菅氏と二階氏のパイプは太く強い。今回も菅氏に出馬を強く促したのは二階氏。恐らく菅新政権では二階氏が幹事長留任するなど今後菅政権で二階氏の力はかなり強まる。それを警戒して、麻生氏らは3人で並んで会見し、菅氏と二階氏をけん制した。三派で200票以上ある。『今後の政権運営でこの200票を忘れるな。人事などでもしっかりと処遇しろ』というメッセージがああ合同会見の意味だ」

菅・二階ラインが一気に強まったのは、昨春秋以降。このころ、令和おじさんとして国民的人気が出始めた菅氏に対して、安倍首相側近が警



首相官邸に入る安倍前総理



心掌握がこれだ。弱った人間、敗れた人間などを迎え入れ心をつかむ。辛い思いをしていた菅さんは『本当によく心配してもらっている』と周囲に語り、そこから二階さんとの信頼関係がぐっと強まった。それに加え菅さんは創価学会幹部とパイプがあるが二階さんも公明党と

「来年の10月が衆議院任期、そこまでに選挙をやらなければならない。秋以降、オリンピック開催の可否や新型コロナウイルスなどリスクが多。ならば自民党が勝つためには、新内閣が発足した直後に国民の期待度も高く野党が新党の準備もできていない段階で解散すればそこそこ勝てる。選挙を菅氏の手でやって勝てばそこからはもう安倍引き継ぎ政権ではなく菅政権になる。気遣いなしに自由にやれる」

戒感を持ち始め、菅人事と言われた2大臣の公職選挙法や政治資金規正法違反のスキャンダルなどをきっかけに首相周辺は菅氏を重要な政策決定などから外すようになり、官邸内で菅氏が浮くようになった。

しかし、そんな菅氏を気遣ったのが二階氏だった。

「二階さんは菅さんに連絡を入れ、大丈夫か?と励ました。二階流の人

いい関係。菅、二階、公明のトライアングルは強い(二階派幹部)

今後菅政権の中では信頼関係の厚い二階氏の影響力が増し、同時に麻生氏らとの確執が生じるのは確実だ。「その前哨戦が3派合同会見(前出ベテラン)ということなのだ。

いずれにしても、5派閥に推してもらった以上、菅氏も人事や政策などで気を遣い制約を受けることにな

る。これまでに表明している政策も、安倍政権を引き継ぐとして、本来菅氏の得意とする「地方」などの政権構想を語れていない。また、モリカケ問題の解明などについても「再調査しない」と明言。菅氏らしさは出せない。

そこでこれを振り切り、菅氏の独自の政権にするための手段として早期解散説が囁かれている。

菅氏に近い自民党中堅議員が言う。



新首相「らしさ」を新内閣の政権構想として掲げるべき

中」と話す自民党幹部もいる。さら

に、菅氏と最も信頼関係にある二階

氏は「早期解散いいんじゃないか」

と話していると二階派議員は言う。

すでに自民党本部が選挙区ごとの情

勢調査を行ったとの情報も流れてい

る。

「地方」をキーワードに

「菅らしさ」を！

菅氏については、総務相時代から

年に数回、1対1で取材する機会を
得てきた。

総裁選前後や首相就任後も、メディアはその生い立ちなどを盛んに取り上げ、人となりを伝えているが、私が訊いてきた政治家・菅としての政策のキーワードは「地方」だろう。令和会見直後に、政治家としての姿勢を訊いた時の菅氏の発言だ。

——菅さんは高校卒業後に秋田から上京し働きながら大学を出て地盤も看板も資金もない中で政治家を目指した。政治の原点の1つが故郷にあると思うが

「私は故郷を断ち切れません。38歳のときに横浜市議会議員に出馬したんですが、そのときの選挙区というのがなかなか地元意識が強くて私のようなよそ者は厳しいかなど。でもそこで敢えて私はチラシなどに秋田出身と書いたんです。すると、都会というのは地方から出てきた人が多いですから、『俺も秋田だ』『東北出身だ』『俺は九州だが同じ地方出身だ』と逆に応援していただいたんですね。総務大臣の時にふるさと納税を提唱したんです。地方から出てきた人間というのは政治家もそ

うですし皆さんもそうだと思いますが、一定の年齢になったら自分を育ててくれて自分の両親の面倒も見てくれた故郷に、何らかの形でお返し

がしたいと思うんじゃないでしょうか。それで、私の場合は当選2回の頃からふるさと納税を温めておいて、4回生で総務大臣になったので『やるぞ』と。ずいぶん抵抗もありましたけどね（笑）」

その後、インバウンド、IR、外国人労働者の受け入れ、新型コロナウイルスのGOTOキャンペーンなど、菅氏の経済政策は、じつはどれも常に地方を主眼にしたものだ。地方の経済の活性化や地方の労働力が柱である。

ならば、そうした「らしさ」を新内閣の政権構想として堂々と掲げるべきだろう。東京一極集中が加速し、人口が減り、地方は存続すら危うい。菅氏の「地方政策」は時代の要請ともいえる。

安倍政権をただ継続することは単に自民党内の権力構図に居続けるだけの安易な姿勢でしかない。（了）

